人権なら

● ひと・まち・生き活き

2026年1月1日

第181号

NPO なら人権情報センター

戦争は絶対にしないことだ

2026年 年頭あいさつ

NPOなら人権情報センター理事長　古川 友則

新しい年を迎えた。ロシアによるウクライナ侵攻は4年目を迎える。「和平」にはドネツク州全域の割譲が条件だという。理不尽極まる話ではないか。ガザでは「停戦」後も連日、イスラエルの攻撃が続く。多くの避難民がテント生活を強いられ、飢餓に苦しむ。疾病リスクも高まっている。

昨年の参院選では、「外国人政策」問題が焦点にされた。その世論を形成したのがSNS。「国民健康保険料の外国人未納額は4，000億円。ただで医療を受けている」との投稿が拡散した。厚労省公表の2022年の未納額は1,240億円。しかも国籍を問わない総額でだ。完全な虚偽で、デタラメがまかり通った。

多文化共生型社会をめざして歩んでいきたい

外国人の多くは「日本で頑張って幸せになりたい」という夢を持って来日している。少子高齢化と労働力不足はもはや日本人だけでは解決できない。多文化共生型の社会をめざすのは必然のことである。

高市首相が台湾で武力行使を伴う有事が発生した場合、「存立危機事態」だと発言した。これは日本と密接な関係にある他国が攻撃され、日本の存立が脅かされ、国民の生命・自由に重大な危機が及ぶ場合、集団的自衛権行使が可能というものである。

かつて俳優の菅原文太さんは「政府の役割は二つ。国民を飢えさせないこと。戦争を絶対にしないこと」と沖縄での集会で喝破した。この言葉の持つ意味がいまほど問われる時はない。心に刻み歩んでいきたい。

確定申告相談会を実施へ

奈良県中小企業者協会は2月4日から25日まで県内10会場で2025年分確定申告相談会を開く。支局会員を対象にした確定申告相談会の日程は下表の通り。（**写真**は2024年の相談会）

＜2025年分確定申告相談会＞

日	時　間	対 象 支 局	会　場
4（水）	9:30～12:00	奈良支局 杏南分局	杏南老人憩いの家
6（金）	9:30～12:00	五條支局	五條市人権総合センター
	15:00～17:30	大和高田支局	西部文化センター
9（月）	9:30～16:00	御経野支局	天理市人権センター
10（火）	9:30～16:00	石ノ上・市場支局	天理市人権センター
12（木）	9:30～16:00	川西支局、田原本支局・嘉幡支局	川西町東人権文化センター
13（金）	9:30～16:00	平群支局 生駒支局	平群町総合文化センター
16（月）	9:30～16:00	大和郡山支局 南井分局 小泉出屋敷分局 安堵支局	西田中町ふれあいセンター
17			
18			
19（月）	9:30～11:30	奈良支局 古市分局	奈良市東人権文化センター
20（金）	9:30～16:00	河合支局 上牧支局	河合町心の交流センター
24（火）	9:30～16:00	三宅支局	三宅町あざさ苑
25（水）	9:30～16:00	御所支局、高取支局、吉野支局、山添支局、宇陀支局、直轄、その他の地区	三宅町あざさ苑

三宅町に響き渡った人権と平和

300人が集い賑わった生き活き交流祭

第31回生き活き交流祭が12月７日、三宅町文化ホールや交流まちづくりセンターMiiMo、同広場であった。多くの出店が並び、300人超が集った＝**写真**。

「さみどり」のオカリナ演奏でオープニング。浅井真紀・三宅小学校長の進行で古川友則・実行委員長と森田浩司・三宅町長があいさつした。

そのあと、「キャンディーワン」のK-POP、「フラワーフィッシュ」のストリートダンス、「ハウオリ・オハナ」のフラダンスの披露が続いた。

文化ホールでは、幼児園児の絵画、小学生の作品・絵画・習字や、介護事業所「菜の花」と「ぽかぽか」の紹介展示のほか、三宅町未来の学校プロジェクトのブースも設けられた。ひまわりの家は作品販売した。

川口真由美コンサート、太鼓、紙芝居、創作劇

午後は式下中学校吹奏楽部の演奏でオープニング。メインはシンガーソングライターの川口真由美さんによる「三宅に響け平和コンサート」＝**写真**。川口さんは反戦、護憲、反原発、辺野古基地建設反対などの運動に関わる。

このあと、3歳から5歳の三宅幼児園児が「歌って、奏でて、笑顔のメロディー」と題し歌を発表。ひまわり和太鼓チーム「コスモス」による演奏に続き、式下中学校の「紙芝居制作の会」が校区ゆかりの忍性と世阿弥の紙芝居を披露。「ちゅらら～」が「創作エイサー」を演じ、会場は大盛り上がりした。

舞台の最後は「劇団かいほう塾」の創作劇「空と風と星と～ユ・グァンスンの生涯」。ガァンスンは朝鮮の独立運動家。劇は「戦後80年を経た今、過去の教訓を胸に刻みながら、大切な隣国と友好関係を築くために何をすべきか考えたい」と熱演。交流祭を締めた。

子どもたちと生き合っていく

古川沙樹さんが三宅町人権学習講座で話

三宅町人権学習講座が12月11日、MiiMoであった。NPO法人サンタピアップ（平和）代表の古川沙樹さんが「輝く笑顔とともに―カンボジア、子ども支援の現場から」と題し話をした＝**写真**。

カンボジアとの出会いは後悔からあこがれに

沙樹さんがカンボジアを訪れたのは栗本英世さんのスタディツアーに母に連れられ何もわからないまま参加したのが最初。そのときは、子どもたちに「食べ物ちょうだい」と寄ってこられ、大泣きした。

2度目の訪問時、子どもたちはたくましく生き、できることを一生懸命やっている姿に接した。勘違いしていた自分が恥ずかしくなった。見方が変わり、子どもたちをあこがれるようになった。

その後、日本で福祉の仕事を続けたが、カンボジアのことが頭から離れない。栗本さんに手紙を書くと、「熱烈歓迎」の返事。両親に「カンボジアに住むわ」と。1年間のつもりが、15年も経っていた。2013年にはサンタピアップを友人と設立した。

お互いが尊敬し合い、「友だちになること」が大切

栗本さんは「カンボジア子どもの家」を設立。地雷を撤去し学校を建て井戸を掘り、子どもたちの教育を支援した。だが、2022年に死去した。

沙樹さんがカンボジアの人たちと活動する上で大切にしていることは「友だちになること」だ。お互いが尊敬し合ってこそ成立するという。

栗本さんの言葉を胸に刻み遺志を引き継いでいきたい。「カンボジアの子どもたちから教えてもらうことは一杯。そんな子どもたちと生きていきたい」と話した。

トランスジェンダー生徒と学校

土肥いつき・研究員が関大人権問題講座で報告

関西大学人権問題研究室の公開講座が11月28日にあった。土肥いつき・研究員が「トランスジェンダー生徒と学校―ユイコさんの実践から学ぶこと」と題して報告した＝**写真**。

トランスジェンダーは生まれたときに割り当てられた性別と、自身が認識する性別が一致しない人たちのこと。当事者でもある土肥さんは現職の高校教員であると同時に、同大学での非常勤研究員でもある。

「逸脱とされる振る舞い」は「ふさわしい」もの？

学校の役割は性別分化を明確化かつ意識化させることだ。幼児教育で基礎を固め、最終の高校教育では自分で性別を決定させるのだという。

ユイコさんはカミングアウトをしないで保育所から高校までどのように自分の性と向き合い、まわりの生徒との関係をどう築いてきたのか。

日常生活の中で「割り当て」られた性別からの移行は、トランスジェンダー生徒の実践と、まわりの承認の相互作用によって成立する。

「逸脱とされる振る舞い」が「逸脱」とはみなされず、その人に「ふさわしい」ものと判断されることになる。

生徒の「支援」から「学校づくり」へと変わること

類まれとしか言いようのない「能力」で過酷な状況を生きぬいてきたトランスジェンダー生徒たち。葛藤を軽減する方法として、「支援」から「学校づくり」へ変わることを提案する。

学校は一方的に支援や配慮を押し付けられる場所ではなく、「居心地のよさ」を探すことができる場所であることだ。性別のお試しをすることもできる。

なんでもこい！の幅広い自由度が学校には求められていると話した。

知的・発達障害を疑似体験

河合町人権教育講座でワークショップ

河合町人権学習講座が12月11日、MiiMoであった。奈良県手をつなぐ育成会の啓発キャラバン隊「ならほんわか♡はーと」のメンバーが「知ってください！　知的・発達障がいのこと～疑似体験ワークショップ」と題して話をした。

講座では、「障害があるということでの暮らしにくさ」について疑似体験した。頭ではなく、心と体で「もどかしさ」や、「とまどい」を感じる。この「感じ」が障害への理解を深め、サポートすることにつながるのだという。

「その辺」を絵に描くことの体験に頭を悩ます

体験プログラムは「描いてみよう」。「リンゴ」「ボール」「その辺」を描く。リンゴとボールは想像ができ、容易。だが、その辺は抽象的で想像しにくい。頭を悩ませた。

普段、無意識に使っている言葉は知的障害のある人にとってあいまいで伝わりにくい表現だ。具体的に、ゆっくり、絵や目印を伝えるなど、よくわかるように伝えようと説明を受けた。

障害者への「合理的な配慮」を心掛けたい

挨拶しても無視。同じことを繰り返し言う。パニックになったり、怒ったり、大声を出すなどには必ず理由がある。知的・発達障害のある人の中には特有のこだわりや、特徴的な行動・動作があることをサポートする上で知っておくことが大切だ。

県民の約14人に1人が障害者手帳を所持する。障害は誰にでも生じる。決めつけ、差別、無関心から、理解、手助け、協力といった「合理的な配慮」を行うことで共生社会に向けて進んでいく。ハンデのある人が住みよい街は誰にとっても住みよい街だと教わった。

ハンセン病問題で交流・講演会

架け橋の会などが宇陀市で開催に200人

第5回ハンセン病問題交流・講演会が12月14日、宇陀市人権交流センターであった。主催は架け橋　長島・奈良を結ぶ会と宇陀市人権教育推進協議会。200人が参加した。

沖縄在住の家族訴訟原告、O・Mさんが記念講演。「この世に生まれ得なかった子どもたちの思いを背負って」の演題で自身の厳しい被差別体験を語った。

近隣住民などから「患者の子」と厳しい差別

Oさんは「ハンセン病患者に子どもは生ませない」という政策下、堕胎手術の失敗でこの世に生を受けた。後年、父にそう聞かされ、ショックを受けた。幼少期、狭い島で療養所にいたことがバレ、近隣住民に「ハンセン病の子」と差別され、学校でも虐められ、辛い思いをした。お店では売ってくれない。住む家も借りられないなど、厳しい差別を受けた。何キロも離れた両親のいる療養所に行くことが唯一の楽しみだった。だが、両親の前ではいつも泣いていた。それがきっかけで両親は退所。一緒に暮らすこととなった。

生まれ得なかった子どもの思いを背負って提訴

国賠訴訟に続き、家族裁判を提訴。「家族のことも歴史にもしっかり刻んでほしい」との思いと、「生まれることができなかった、生まれても口を塞がれ殺された赤ちゃんも国家政策の被害者」との思いで原告に。

裁判では名を伏せて証言。裁判官に「人生被害」だと言及させ差別実態を認めさせた。だが、勝訴後の補償制度への申請数は少ない。家族だと明かされる恐怖心が大きいのだ。勇気を出してカムアウトしても職場を追われ、離婚せざるを得なくなる。問題はまだ終わっていないことを痛感する。

差別偏見を解消するには、今も名乗れず怯えながら生活している回復者や家族がいることを知って欲しい。地域で安心して暮らせる体制ができたら、と。

分科会、企画展示でも熱心に交流・学習

講演後の分科会では、Oさんの娘さんも登壇。大阪の退所者でつくる「いちょうの会」のM・Mさんと福山さん（仮名）、支援センターの協力も得て、豊かな交流議論が交わされた。

本集会に先立って、企画展示が11日から催された。3日間で宇陀市内の小中学生ら延べ350人が来館。架け橋の会の説明を熱心に聞き入った＝**写真**。

編集後記　☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

新年を迎えた。でも、気分はブルーだ。それもそのはず。明るいニュースがない。兆しも見えない。政治も経済も混迷。国際社会もだ。ガザ、ウクライナでの殺戮も止まない。そんな中、戦争への道を歩む大軍拡が威勢良く進む。自ら危機をつくり出している政権。結果、軍事増税はもとより、スパイ防止法、国旗損壊罪など、国家統制や人民抑圧策を講じることで突破する構えだ。論点をはぐらかし、印象操作を図り、差別排外的言辞を振りまき、愚民政治を強行する。あろうことか、そんな動きを支持する人が多い。そのしわ寄せは庶民の生活を圧迫。自身にも及んで来る。私たちの苦難の生活は自己責任ではない。社会的弱者への施策のせいでもない。少し考えれば一目瞭然だ。

ニュースレター「人権なら」
発行：NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223
奈良県磯城郡田原本町鍵301－1
TEL:0744-33-8585／FAX:0744-32-8833
E-mail：info@nponara.or.jp
http：//www.nponara.or.jp/